

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その十九）

海老沢 敏

十一、日本人の歌として（承前）

本稿第三章〈三、小学唱歌《見たせば》で紹介したように、音楽取調掛は、《小学唱歌 初編》および《唱歌掛図 初編》を刊行し、その普及をはかるために、明治十五年の一月末に、公開の《大演習》を催し、デモンストレーションをおこなった。その後から唱歌教育はその歩を刻みはじめるのである。そうした歩みについてここで述べる余裕はないが、《見たせば》について、なお補足を加えておこう。同年の暮、十二月十二日には、学事諮問会会員による音楽伝習所参観がおこなわれた。この機会に伊沢修二は《唱歌の効益及該科開設の方法》などについて説明するた

め《示諭要旨》なる一文を草している。^{（注27）}彼は音楽が教育上欠くべからざるものである所以を縷々述べ、唱歌の実例をいくつも挙げながら、《唱歌ノ徳育ニ資スル所以》を明らかにしたあと、どのようなにして唱歌教育がおこなわれねばならないかについて語り、さらに《其教授ノ方法順序等ノ大綱》を示している。いわばカリキュラムを明示している訳であるが、〈第一 口授唱歌、第二 数字練習、第三 音階練習、第四 譜表ノ練習、第五 単音唱歌、第六 輪唱歌、第七 複音唱歌、第八 洋琴、第九 管絃楽〉という順序が示され、かつ、それぞれについて説明が附されるのである。

（注27） 信濃教育会編《伊沢修二選集》（信濃教育会編、昭和三十三年）。二八〇ページ以下。

〈第一 口授唱歌〉には「凡ソ幼児ニ唱歌ヲ授クルニハ先ヅ其聴力ノ発達ト声律ノ練習トヲ勉メザル可カラズ。是レ最初ニ此科ヲ設ル所以ナリ」とあり、教師が児童にまず歌って聴かせ、幼な児たちがそれを声を出して歌うという勉強の仕方にならざるもあれ、音楽の勉強のもっとも初源的で基礎的なかたちとして提示されているのである。伊沢修二は、この〈口授唱歌〉の実例を二曲じつさいに参観者の前に聴かせているが、一曲は伊沢にとつてまことにかわりの深いあの《蝶々》であり、他の一曲が、ほかならぬ《見渡せば》^(注28)なのである。

(注28) 同右書二九〇ページ。

これら二曲の唱歌が実例として選出されたのは、かでもない、きわめて単純素朴な旋律が、それを聴く幼な児の耳に明快なかたちで捉えられ、かつ、いまだほとんど歌う訓練もしていない彼らの声がそれらの旋律線を正確に再現することができると伊沢修二によつても理解されていたからであらう。

こうした唱歌指導のために、音楽取調掛は教員養成に着手していた。いわゆる〈音楽伝習人〉の養成であつた。〈伝習人〉の募集は、もちろん〈小学唱歌集〉刊行以前から、すなわち明治十三年六月から始められているが、彼らは〈唱歌、洋琴、風琴、箏、胡弓及び欧州管絃樂器^(注29)〉を学ぶよう定められた。その唱歌伝習も

次のような順序によるものであつた。「唱歌を伝習するは、最初簡單なる単音歌曲に起り、漸次高等の唱歌に及ぶものとす」^(注30)

(注29) 伊沢修二・山住正己校注《洋楽事始音楽取調成績申報書》(《東洋文庫》188、平凡社)二七ページ。

(注30) 同右書、二七ページ。

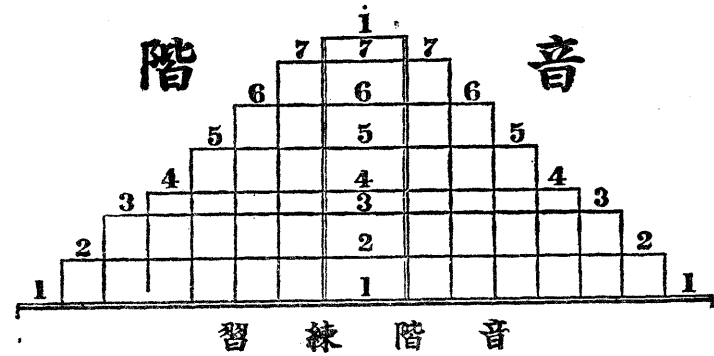
〈伝習人〉の伝習期限は一年が原則であり、前半はピアノと唱歌、後半は音楽教育の実習にあてられていたとされるが、^(注31)《明治十四年七月七日音楽取調掛期末試業略記》なる文書では、編集はすでに終了しているものの、最終稿の決定や出版を俟っていた《小学唱歌集 初編》に所載された唱歌が、カリキュラムの前半に取り上げられているのである。伴奏を用いないかたちで歌われるもの、洋琴を用いて歌われるもの、風琴の伴奏によるものと並んで、〈琴及胡弓ヲ用キテ唱フ分〉として三曲が挙げられ、その最初の曲がほかならぬ〈第十三曲見渡せば〉^(注32)なのである。

(注31) 東京芸術大学音楽取調掛研究班編・浜野政雄・服部幸三監修《音楽教育成立への軌跡——音楽取調掛資料研究》三監修《音楽之友社・昭和五十一年》三四四ページ。

(注32) 同右書三四五ページ。

こうした唱歌教育の推進のためには、一方では、取調掛員が、学習院ならびに東京師範学校と東京女子師範学校、あるいはその

▼ 図版 ①



- [一] 1,2—2,1— [二] 1,2,3—3,2,1— [三] 1,2,3,4—4,3,2,1—
 [四] 1,2,3,4,5—5,4,3,2,1— [五] 1,2,3,4,5,6—6,5,4,3,2,1—
 [六] 1,2,3,4,5,6,7,i— i,7,6,5,4,3,2,1—

附属学校に対しておこなった出張教授が重要な意味をもっている。他方、各地で設立された師範学校の教員が音楽取調掛に派遣されて、ここで唱歌をはじめとする音楽の実践を学ぶというかたち、すなわち〈師範学科取調員〉^(注33)も多くなっているのである。明治十六年の七月におこなわれた師範学科取調員の音楽伝習受講者に対する試験の結果も興味深い。短期の学習という事情から、試験科目は〈唱歌〉と〈風琴〉の二科目だけであるが、計十一人の取調員が受けた唱歌の試験科目は〈見渡せば〉のほか、〈螢〉と〈富士山〉、風琴の科目はおなじく〈見渡せば〉があつたほか、〈若紫〉と〈をぼろ〉^(注34)であつた。ここでも、最初の基本的教材として〈見わたせば〉が位置づけられているのはなほだ意味深いというべきであらう。

(注33) 山住正己著『唱歌教育成立過程の研究』(東京大学出版会、昭和四十二年) 一五二ページ。

(注34) 同右書一五七ページ。

こうして小学唱歌としての〈見わたせば〉はひろく全国に普及していったのである。

なお、先に述べた音楽教育のカリキュラムでは、〈第一 口授唱歌〉の次に〈第二 数字練習〉が置かれている。「聴力既ニ発達スルトキハ視力ニ仮リテ声律ヲ識別スルコトヲ勉メザルベカラ

（注35）
いる。

ラズ(注36)

▼ 図版 ②

ページに置かれた図表（図版②）からも明らかであろう。しかし、この数字譜の問題については残念ながら別の機会にゆだねざるをえない。

（注35）《伊沢修二選集》二八九ページ。

（注36）同右書二八九ページ。

（注37）海老沢敏《数字譜の歩み》（皆川達夫監修・NHK交響楽団編《楽譜の本質と歴史》（《楽譜の世界》1、日本放送出版協会・昭和四十九年）一〇七ページ—一一八ページ）。

こうして小学唱歌《見わたせば》は、初等教育の教材として、児童たちがはじめて唱歌に接し、それを学ぶことによって音楽の世界へと導びかれていくきっかけとなる曲として、ひろく日本中で歌われていたのである。つづいて、この《見わたせば》のその後の命運について語るべきであろう。

この小学唱歌はこうして明治十年代の後半には小学生の歌として親しまれていったが、この唱歌の旋律が別の経路で明治二十年代に讃美歌としても次第にひろく歌われていったことは既に論じたとおりである。ところが、その同じ明治二十年代には、まったく別の、しかも私たちにはいささか意外なかたちで、この唱歌は日本人のあいだで歌われることになる。それはなんと《軍歌》に変身するのである。明治二十年代といえば、日本が対外戦争の時

代に突入した時期でもあった。明治二十七年八月一日、日本は清国に宣戦布告し、日清戦争の火蓋は切って落されたのである。既に十年ほど前から、清国と日本との関係は危機的となっていたが、そのあたりから、狭い意味での軍歌が意識的に創作されていたものであったろう。しかし明治二十七年にはおびただしい数の軍歌が生み出されるのであった。

明治天皇はこの年の九月十三日、東京を出発し、翌々日、広島第五師団司令部に着かれ、ここを大本営と定められたと伝えられている。「御座所は二階東側四十畳ばかりの一室で、この一室が御寝室も御食堂も兼ねたのであるから、天皇には昼夜この御座所を離れ給うことがなく、朝五時の御起床から深夜に到るまで軍服を召されたまま、軍務および万機を統裁遊ばされた。（中略）この御座所の外側には中庭に面して露台がある。この露台にさえも平素は御出ましにならなかったが、御夕食の後、軍楽隊が中庭で奏楽をすると、そのときだけはしばしば露台まで歩を運ばせられた。奏楽は陸海軍の軍楽隊がかかるがわる奉仕したのである。軍楽隊は軍楽とともに軍歌をも奉奏した。陸軍側では近衛師団軍楽隊が大本営附^つとなったが、この隊の楽手加藤（当時は菊岡という姓）義清と荻野理喜治との新作になる《喇叭^{らっぱ}の響》の軍歌は最近の戦闘の実況をよく伝え曲も勇壮である点から特に御心を止め給

い、たびたび奏唱の御下命があった。海軍側でも種々の軍歌を奉唱したが田中穂積樂長の率いる呉海兵団軍楽隊が海軍軍楽隊編曲の《戦闘歌》を十月十一日夜奉唱したときには『作歌は何人の手で行なわれたか』『この歌はいつから軍楽に用いたか』との御下問を蒙った。^(注38)

(注38) 堀内敬三《定本 日本の軍歌》(実業之日本社・昭和四十四年)八七ページ―八八ページ。

この《戦闘歌》こそ、ほかならぬ《見わたせば》の旋律によるものであった。鳥居悦の作詞になる歌詞は次のようなものである。

一、(進撃)

見渡せば寄せてきたる敵の大軍おもしろや。

スワヤたたかい始まるぞ。イデヤ人々攻め崩せ。

弾丸こめて撃ち倒せ。敵の大軍撃ち崩せ。

二、(追撃)

見渡せば崩れかかる敵の大軍心地よや。モハヤたたかい勝

なるぞ。イデヤ人々追い崩せ。

銃剣付けて突き倒せ。敵の大軍突き崩せ。

作詞者鳥居悦は当時東京音楽学校教授であったが、ほかならぬ《見わたせば》第一節の作詞者である。彼は明治二十八年に三巻の《大東軍歌》なる軍歌集を出版しているが、この《戦闘歌》は明治天皇の前で歌われたのちに、この軍歌集に収められたものであった。

原曲《見わたせば》が第一節では春を、第二節では秋を歌い、自然の景色をのびやかにものに歌い上げたのに対して、なんという大きな変容であろうか。この《戦闘歌》にはなおテキストの点でいくつかの異稿がある。たとえば次の稿は《海軍軍楽師吉本光蔵》の作である。^(注39)タイトルは《海戦》となっている。

一、(進撃)

見渡せば寄せてきたる敵の軍艦おもしろや。

スワヤ戦い始まるぞ。イデヤ艦隊攻めかかれ。

弾丸こめて撃ち払え。敵の軍艦うちくだけ。

二、(追撃)

見渡せば沈みかかる敵の軍艦こちよや。

モハヤたたかい勝なるぞ。イデヤ艦隊追い迫れ。

水雷かけて打ち碎け。敵の軍艦くつがえせ。

▼ 譜 例 ③

戦 園 歌

(一) ヨ セ グ ル ハ ス ハ ヤ テ キ ヨ
 (二) く づ る る は あ は れ て き よ

ラー ッ バ タ カ タ ナ リ ソ タ ル
 てー ん に ひ び く と き の こ ゑ

ミ ダ レ チ ル マ マ ノ ア ラ レ
 わ れ は は や か ちー なる ぞ

ノ ベ チ ハ シ ル イ ナ ビ カ リ
 お へ や お へ や お ひ つ め て

ミー ヨ ヤ ホ ヘ イ ハ ツ キー イ リ ス
 ひ づ め に か ー げ よ て きー へ い な

テー キ ノ ソ ナ ヘ ハ ク ズ レ タ リ
 と り こ に な ぜ やー て き へ い な

(注39) 「日清戦争のうちに海軍軍楽師吉本光蔵はこの歌詞を海軍の戦闘に改めて左の『海戦』と題する歌詞を作り、その後吉本楽長はこの旋律をトリオに入れて『進撃追撃行進曲』を作った。」(堀内敬三『定本 日本の軍歌』八八ページ—八九ページ)

さらに明治二十九年五月二十六日発行の《新編教育唱歌集 第二集》^(注40)にはこの《戦闘歌》は、前二稿とはまったく異なったテキストをもつて収録されているのである。

陸軍

(一) 寄せ来るは、すはや、敵よ。喇叭^{らっぱ}高くなりわたる。
みだれちる丸のあられ。野辺^{のへ}を走るいなばかり。
見よや。歩兵は突き入りぬ。敵の備はくづれたり。
(二) 崩るゝは、あはれ、敵よ、天にひびく関の声。
われははや勝なるぞ。追へや。追へや。追ひつめて、
蹄^{ひづり}にかけよ、敵兵を。とりこになせや、敵兵を。

海軍

(一) 黒烟空に吐きて、すみみ来る敵の艦。
待ちてかひありて、うれし。海の底にうち沈め、

国のあたをばたひらげん。あふげ、輝やく軍艦旗。
(二) わが丸はねらひそれず。もゆる艦に沈む艦。
叶はじと、残る敵は、力かぎり逃げてゆく。
救へ、おぼるゝ敵兵を。追へや。逃げゆく敵艦を。

(注40) 教育音楽講習会編纂《新編 教育唱歌集 第二集》東京 開成館蔵版(明治二十九年五月)

最後の稿の楽譜を掲げてみよう(譜例③)。ニ長調という軍隊的で勇壮な調をとったこの《戦闘歌》は、歌詞との関係もあるが、四分の二拍子を取り、《見わたせば》の原旋律の二分音符に対応する四分音符が多くの個所で八分音符に分割されることによって、軍隊的な激しさ、勇ましさ、絶えざる動きを表現するように変えられている。《ルソーの夢》も欧米において、歌詞ならびに旋律の点でさまざまな変容を蒙ったものであったが、明治二十年代の日本が突入していた軍国的な時代にあっても、そうした状況に即応したメタモルフォーズをこのメロディーは経験しなればならなかったのである。ちなみに、この《戦闘歌》の譜にも数字がつけられている。

(国立音楽大学)